

幕末に曹洞宗の 宗権確立に挺身した 臥雲禅師



臥雲禅師肖像（玄勝院蔵）

近代社会への変革を目指した幕末明治期。この大変革期に23年にわたり大本山永平寺の舵を取った人物が臥雲禅師です。

臥雲禅師は、寛政2（1790）年、薩摩国（鹿児島県）日置郡に弓削家の八男として生まれました。14歳で出家し、19歳の時、薩摩を旅立ち、相模国東照寺等で修行した後、天保6（1835）年、江戸大円寺の住職に抜擢されます。そして、嘉永元（1848）年、越前永平寺60世住職に就き、永平寺を取り仕切るに至りました。

臥雲禅師は、薩摩と切り離せない縁があったといえます。禅師に長年寄り添い副寺として支えた高弟、大辻是山は薩摩出身でした。また、西郷隆盛、大久保利通と親交があり、永平寺住山の後も、上洛の際は京都の天寧寺において交際しています。特に西郷は永平寺にも来ており、禅師は常に彼を「吉之助」と呼ぶ親しい関係だったと言います。さらに、禅師は、江戸に出府した際には常に島津家を訪ねており、島津斉彬が有事の際は、臥雲、是山を使うべしと語るなど、大変信任が厚かったと言われています（『西郷隆盛伝』終

わりなき命』より）。

臥雲禅師の功績は、大きく3つが知られています。一つ目は、嘉永5（1852）年に行った、開祖である道元禅師の六百回大遠忌奉修。永平寺に10万人余りの参詣者があり大成功を収めました。二つ目は、嘉永7（1854）年に孝明天皇から下賜された、道元禅師の「仏性伝東」という国師号の実現。禅師は、実現にあたり、井伊直弼に面会し助力を働きかけたと伝わっています。三つ目は、明治新政府の誕生を好機に取り組んだ、宿願であった永平寺総本山制、宗規一新です。松平春嶽の知遇の厚い彦根清涼寺住職、鴻雪爪が禅師の片腕として動いたと言います。結局、能登の総持寺が反対し両本山制となりましたが、明治元（1868）年10月には、他の宗門よりもいち早く宗教政策についての公論の場（会議）が設けられ、高く評価されています。

永平寺と総持寺による争論は4年にわたり続き、この間、明治3（1870）年11月に臥雲禅師が81歳で逝去します。争論での形勢不利を恐れた是山は、喪を1年間隠し続けました。禅師が不在では立ち行かない、そんな状況だったのかもしれ

ません。

幕末明治期に永平寺の舵を取り、宗権確立のため奔走した臥雲禅師。その激動の長き道のりを貫いたもの、それは、大本山永平寺への一途な誠の心に違いありません。

関連史料・ゆかりの地

大本山永平寺



永平寺唐門

曹洞宗開祖・道元禅師が寛元2（1244）年に開いた坐禅の修行道場。境内には大小70棟余りの建物が並び、回廊で結ばれています。2015年からフランスの旅行ガイド本「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」にも掲載されています。

【住所】永平寺志比5-15（JR福井駅より京福バス「特急永平寺ライン」で約30分）

参考資料等

臥雲禅師語録刊行会編『臥雲禅師語録』上下巻 大本山永平寺
尾辻紀子『雲水街道をわたる』講談社出版サービスセンター